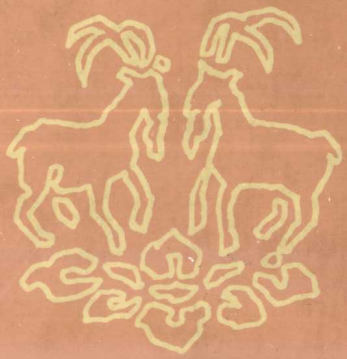
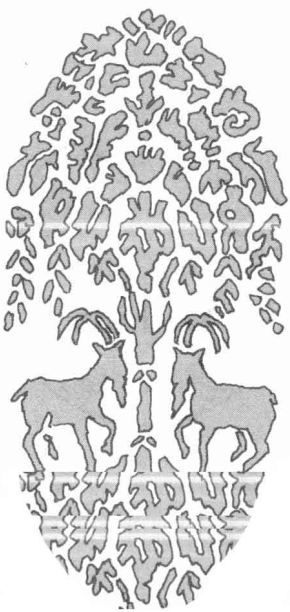
萬葉集 五



完訳 日本の古典 6

萬葉集五

小島憲之・木下正俊・佐竹昭広　校注・訳



小學館

完訳 日本の古典 第六巻 万葉集(五)

昭和61年10月31日 初版発行 定価一七〇〇円

校注・訳者 小島憲之 木下正俊 佐竹昭広

発行者 相賀徹夫

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 株式会社 小学館

〒101 東京都千代田区一ツ橋二―三―一

振替口座 東京八―二〇〇番

電話 編集 (〇三) 二九二―四七六三 業務 (〇三) 二三〇―五三三三 販売 (〇三) 二三〇―五七三九

・造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたらおとりかえいたします。

・本書の一部あるいは全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。

Printed in Japan

© N.Kozima M.Kinosita A.Satake 1986 (著者検印は省略いたしました)

ISBN4-09-556006-1

目次

凡例……三
巻第十四……九
巻第十五……一一九
巻第十六……二三三
巻第十七……三〇七
解説……四二三
付録
萬葉集関係略年表……四四〇

口絵目次

尼崎本万葉集……1
伎楽面……2
越中国庁跡……4
〈装丁〉　中野　博之
参考地図……四三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

凡　例

一、本書は、現代の多くの読者に『万葉集』に親しんでもらえるように配慮して、読み下し本文を左ページに、現代語訳を右ページに示して対照しやすくし、下段に簡潔な注解をほどこしたものである。

一、本文

1　左ページの本文は、西本願寺本万葉集を底本としてあらたに校訂を加えたものを、漢字仮名混じり文に読み下したものである。なお、原文はすべて漢字によって書かれているが、本書においては割愛した。

2　用字については、常用漢字表にある漢字は、原則としてそれを用いた。

3　読み下し本文を作るにあたり、古写本の校合は、校本万葉集によると共に、実見することを得た本（元暦校本・尼崎本・検天治本・紀州本・神宮文庫本・西本願寺本・陽明本・大矢本・京都大学本など）については実物によって再検証し、また天治本・類聚古集・古葉略類聚鈔などの、複製本を以て代替可能と思われる本はそれによった。春日本・金沢文庫本などの諸家に伝わる断簡類についても、博捜に努め、誤りなきを期した。

4　「或本の歌に曰く」「一に云ふ」などの異伝に関する注記、あるいは訓注の類は、〈　〉でくくって示した（現代語訳もこれに準じる）。

5　訓読は、先学の諸説を検討した上で、最も妥当と認められる説によったが、そのいずれにも従いがた

い場合は、校注者の見解にもとづいて読んだ。

6　いわゆる難訓歌に対しては、強いて異を立てず、原文のままで掲げて、後考を待つことにした。

7　読み下し本文および現代語訳の上につけた歌番号は『国歌大観』による。

8　読み下し本文・現代語訳とも、一句ごとに一字分の空白を置いた。

9　題詞・左注の読み下し文は、上代散文にふさわしい文体を復原することに努めた。

10　目録は、すべての現存古写本は各巻巻頭にあるが（巻十六以下の非仙覚系諸本を除く）、本書においては割愛した。ただし、校注の参考になるものは、該当箇所の脚注にこれを引用し、理解の助けとした。

一、現代語訳と脚注

1　現代語訳はなるべく原文から離れないように直訳に近い形をとった。歌意は随時脚注を参照しつつ把握されたい。

2　枕詞は（　）でくくり、仮名づかいも本文のままとした。

3　脚注は本文の理解に必要な事項を簡潔に記した。

4　出典などに関して参考に引いた漢文は、原則として片仮名混じりの読み下し文に改めた。

5　紙幅の関係上、同一句や類似句の説明で前出（まれに後出）したもの、または参考になるものは→で示した。平数字は歌番号を示す。

6　作品の理解を助けるため、参考となる関連事項・評言などには◈印を付し、語の注と区別した。

7　脚注の振り仮名は現代仮名づかいにしたが、本文中にある語についてはそのままに示した。

一、その他

口絵に掲載した「尼崎本万葉集」については京都大学付属図書館の、「伎楽面」については東京国立博物館および宮内庁正倉院事務所の協力を得た。「越中国庁跡」は青山富士夫氏の撮影に成る。

萬葉集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

萬葉集卷第十四

萬葉集巻第十四

東歌

3348 （夏麻引く）海上潟の　沖の洲に　船は泊めよ　夜もふけてきた

右の一首は、上総国の歌

3349 葛飾の　真間の浦辺を　漕ぐ船の　船人たちが騒いでいる　波が立ってきたらしい

右の一首は、下総国の歌

一　東国で歌われた歌謡。ここにいうアヅマの範囲は、東海道は遠江以東、東山道は信濃以東と考えられる。前半三四七以前の歌はそれぞれ詠み込まれている地名によってそれらの国名の判定が可能だが、後半三五八以後の歌はそれが不可能で、仮に一括して「未勘国歌」と呼ばれている。各雑歌・相聞往来歌・譬喩歌と分類されているが、冒頭の五首は雑歌であるのに、その部首名がない。ただし、目録には「上総国雑歌一首」「下総国雑歌一首」などとなっている。

3348　夏麻引く―海上・ウナヒなどの枕詞。詳。○海上潟―上総国海上郡の沿岸地帯。海上郡は現千葉県市原市養老川の流域一帯をいう。ただし、下総国にも海上郡があり、それは銚子市・旭市を含む現海上郡に当る。左注の国名は歌中の地名によって編纂者が判定したものであるため、下総国のそれの可能性もある。○沖つ渚に船は留めむ―カシ（三六三）などを立

萬葉集巻第十四

東歌

3348 夏麻引く　海上潟の　沖つ渚に　船は留めむ　さ夜ふけにけり

右の一首、上総国の歌

3349 葛飾の　真間の浦廻を　漕ぐ船の　船人騒く　波立つらしも

右の一首、下総国の歌

てて繋留することをいうか。船頭などに言ったものか。

◇類歌三四・二三九。二一六はこれと上三句が同じ。

二　千葉県南部。千葉県北部の下総国の対でそれより都寄りなのでいう。この「上」は中央に近いことを意味する。この当時武蔵国は東山道に属しており、東海道は相模・上総・下総・常陸という配列順であった。なお、この南の安房国は養老二年(七一八)に分立されたが、天平十三年(七四一)に再び上総国に併合されている。

3349 葛飾―千葉県の我孫子・柏・流山・鎌ケ谷・松戸・市川・船橋・浦安の諸市を含めた東葛飾郡、埼玉県の三郷市を含めた北葛飾郡、および東京都の葛飾・江戸川両区の一帯の地。中央ではカツシカとツを清音に唱えたが、「東歌」では濁音仮名「豆」が主に用いられ、カヅシカが一般であったと思われる。○真間の浦廻―この真間は千葉県市川市真間町の辺。奈良時代この辺まで海が入り込んでいた。葛飾の真間の娘子を詠んだ歌(一八〇七)に「波の音の　騒く湊の　奥つ城に　妹が臥やせる」とある。浦廻は入江の湾曲部。

◇類歌三三八。

三　千葉県北部。

3350 筑波嶺の　新桑繭の　衣はともかくとして　あなたのお召し物が　むしょうに着たい

ある本の歌には「母上の」とあり、また「たんまり着たい」ともある。

3351 筑波嶺に　雪でも降ったのかな　違うかな　いとしいあの娘が　布を晒しているのかな

右の二首は、常陸国の歌

3352 信濃の　須我の荒れ野で　ほととぎすの　鳴く声を聞くと　その時節は過ぎたらしい

右の一首は、信濃国の歌

3350　筑波嶺―筑波山。標高八七六メートル。こはその山麓一帯を主としていう。○新桑繭の衣はあれど―春蚕の絹衣はそれなりに結構であるが。柔らかい新葉の桑で育った春蚕の絹糸は初秋蚕や晩秋蚕のそれに比べて品質が優れている。マヨはマユの古形。…ハアレドは、それなりに良いが、それはともかくとして、のような気持を表す語法。○御衣し―ケシは着ルの敬語形ケスの名詞形。下のシは強め。○あやに着欲しも―アヤニは副詞、口では言い表せないほどに、の意。着欲シは着たく思われる意。○「たらちねの」―第一句の異伝。ここは「たらちねの母の」の意でかけた。○「あまた着欲しも」―このアマタは程度副詞で形容詞を修飾し、程度の甚だしいことを表す。

3351　雪かも降らる―降ラルは中央語の降レルに当る東国語形。東国語ではeがaに転ずることがあり、良ケバが良カバ、遠ケドモが遠カドモなどとなって現れた例がある。狙ヘリ・置ケリなどの、動詞の連用形＋アリの約まった継続や結果の残存を表す語法も狙ハリ・置カリなどとなることが時にあり、着リや助動詞

3350
筑波嶺の　新桑繭の　衣はあれど　君が御衣し　あやに着欲しも

或本の歌に曰く、「たらちねの」、また云はく、「あまた着欲しも」

3351
筑波嶺に　雪かも降らる　いなをかも　かなしき児ろが　布乾さるかも

右の二首、常陸国の歌

3352
信濃なる　須我の荒野に　ほととぎす　鳴く声聞けば　時過ぎにけり

右の一首、信濃国の歌

ケリがカリとなった例もある。告ラロ（三四九）・萌ラロ（三五六）はこの連体形がさらに音転したもの。第五句の乾サルも乾セルの東国語形。○いなをかも―イナカモヲカモの意。イナは否、ヲは諸の応答詞。違うかな、いやそうかな、と判断に迷う場合に用いる。この句を含む歌は前述内容が疑われ、後述内容が真相。○かなしき児ろ―カナシはせつないばかりにいとしい意。ロは接尾語。○布―ヌノの訛り。ヌノは麻などで製した粗布。

◎筑波山麓に、辺り一面に雪が降ったかと見紛うほどに白布を乾してある、布晒しの景を詠んだ歌。後世の俗謡類にこの種のものが多い。

一　今日の茨城県の大半に当る。

3352　信濃―現長野県。○須我の荒野―所在未詳。『和名抄』（高山寺本）に「筑摩郡崇賀」とある所、現在の松本市西方の地とする説や小県郡真田町菅平辺に擬する説がある。「荒野」の原文は「阿良能」とある本によって、「能」は仮名違いとされていたが、最近発見された元暦校本の断簡に「安良野」とあるのに従うがよい。○時過ぎにけり―この「時」がいかなる内容をさすかについて諸説がある。田植えの時期とする案が比較的に穏やかか。

相聞

3353 亀玉の　寸戸の林で　おまえに見送られて　行けそうにない　それよりまず一緒に寝よう

3354 寸戸人の　斑蒲団に　入れた綿のようにたっぷり　入って来ればよかった　あの娘の床に

右の二首は、遠江国の歌

3355 天の原の　富士の柴山の　木の下闇の　時が過ぎたら　あの人は来ないのではなかろうか

3356 富士の峰の　やたらに遠い　山路でも　おまえに逢うためなら　造作なく来た

3353 亀玉―遠江国の旧郡名。静岡県浜北市および浜松市北部一帯の地。○寸戸の林―寸戸は亀玉郡内の地名か。浜松市東北の貴平に擬する説もある。「亀玉の寸戸が竹垣」(三五三〇)ともあった。○汝を立てて―ナは同等以下の人に多く用いる。ここは男から女に向っていう。タテは立たせて。作者が旅に出るのを女が別れづらそうに見送ってたたずんでいるのを、作者がそうさせているように表した。○行きかつましじ―カツは可能、マシジはマジの古形で否定推量を表す。○寝を先立たね―イは寝ること。ここは野外で交わることをいう。この先立ツは、他のことをするより前に、あることを行う意。ネは希求。共寝のいざないには、このような希求ないし命令表現を用いる。

3354 寸戸人―寸戸の地に住む人。「寸戸人が竹垣」(三五三〇)の助詞ガの使用からみて、いなか者と考えられていたものか。○斑衾―斑染めの掛蒲団。○綿さはだ―当時の綿は真綿。サハダは数量の多いことを示す副詞。この辺まで比喩の序。寄物陳思的表現(→[4]解説四八一ページ)。○入りなましもの―マシモノは反事実の仮想

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook